

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第23回 土肥刀泉

陶芸と出会う

土肥刀泉は、明治32(1899)年3月31日、印旛郡公津村八代(現在の八代)に父広吉、母志んの次男として生まれ、名を卓といった。刀泉は幼少年期から一本気で、成田中学校(現在の成田高校)在学中には、ストライキの先頭に立って学校側と対決することもあった。その気質が、後に陶芸に対する情熱へと向けられることとなる。

大正5(1916)年、千葉における陶芸の先駆者といわれる父広吉は吾妻神社の近くに登り窯を築き、神社の繁栄にあやかって「吾妻焼」の製造・販売を始めた。当時、中学生の刀泉も、窯場に来ては職人の作業を見て陶芸の技術を学んだ。同10年、親戚縁者の出資金で吾妻製陶株式会社を設立。刀泉は吾妻焼の製造を行う傍ら、焼き物の質感や色合いにこだわり、さまざまな材料を使用して釉薬を調合するなど陶芸の研究にも打ち込んだ。

しかし、吾妻神社への参詣客の減少とともに販売業績は悪化の一途をたどる。さらに、大正12年には関東大震災により窯が壊れるという致命的な被害を受けた。そして同13年、倒産の危機にひんした状態で、一家は千葉の椿森へ転居した。

さらなる一步を

昭和2(1927)年、椿森で窯を開き陶芸活動を続けていた刀泉に転機が訪れる。関東大震災以降、千葉へ移り住むようになって



左/国松薬局の画廊で開かれた東陶展



右/琅瓷釉彩花瓶(千葉市美術館所蔵)

明治32年～昭和54年(1899～1979)

印旛郡公津村八代(現在の八代)に生まれる。本名は卓。吾妻神社の近くで父と共に吾妻製陶株式会社を設立し、陶芸を始める。東陶会に所属し、創作活動を行う傍ら、千葉県美術会の創設に参加するなど、美術振興に貢献。その功績により、昭和39年に県功労者表彰文化功労を受賞、同47年には勲四等端宝賞を受賞した。



た多くの陶芸家が、文化勲章を受賞した初の陶芸家として知られる板谷波山の下に集まり、東陶会を結成。刀泉も創立会員として参加した。独学で研究を行っていた刀泉にとって、東陶会に所属し、一流の陶芸家に触れたことは大いに刺激となった。特に、波山に影響を受けた刀泉は、以前から調合の研究をしていた釉薬の中でも主に艶消釉の研究を行うようになり、その後の作品にも取り入れるようになった。

昭和3年、国松ノブと結婚。ノブの実家である国松薬局の画廊で東陶会展を開くなど、旧家であった国松家の支えにより、刀泉の作品は識者の間に広く知られることとなった。同年、日本美術協会展で受賞した後、数々の公募展で受賞・入選を重ね、同7年、現在の日展の前身である帝展で入選を果たした。

その後も慢心することなく、艶消釉の研究を続け「琅瓷釉」を開発。勾玉のような色合いや質感を表現できる琅瓷釉により、刀泉は自身の目標としていた端正にして優雅な独特の作風を作りあげた。

昭和24年、創作活動に精進する傍ら、戦後復興の中で千葉県美術会の創設に参加し、常任理事を務めるなど県の美術振興に大いに寄与した。その功績により、同39年に県功労者表彰文化功労を受賞、同47年には勲四等端宝賞を受賞した。

陶芸の大家としてゆるぎない地位を築いた刀泉は、昭和54年6月23日、80歳でその生涯を閉じた。

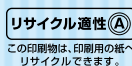
編集後記

4月21日に行われた市議会議員選挙では、29人が当選となりました。定数は30人なのになぜと疑問に思った人もいるのではないのでしょうか。公職選挙法では、法定得票数(今回の場合、有効投票数(46,542票)÷定数(30人)÷4=387,850票)以上でなければ、当選できないとされているのです。本市では過去に例がなく、平成の最後に珍しい結果となりました。激戦を勝ち抜いて新たに議員となった皆さんには、市政を担う代表者としての活躍が期待されます。

令和元年5月15日号 No.1387

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。